

天眼鏡

人類学から見る肉食の価値

忙しさに追われて本を読む時間はなかなか確保できず、読書の中心は自宅と都心を往復する電車の中になるが、電車の振動が心地よく、ついつい居眠りしてしまうことも多い。したがってゴールデンウィークはある程度の読書時間を確保できる稀で貴重な時である。今回は読みかけも含めて3冊ほど読んだが、その中の一つが更科功著『絶滅の人類史』（NHK 出版新書）である。

この本は2018年に発行されたもので、2018年の啓文堂書店の新書大賞の第2位になるなど、けっこう話題を集めて、本屋に山積みされていたことから買い求めたものだ。しかしながら数十頁を読んだだけで、積んだままになっていた。それが今年の正月に読んだ山極壽一著『共感革命』（河出新書）が非常に面白く、その流れというか、同じ人類学関係につき、積んだ中からほこりをはたいて、あらためて読み直し始めたものである。

本書の副題は「なぜ『私たち』が生き延びたのか」とある。「チンパンジーに至る系統とヒトに至る系統が分岐してから、ヒトに至る系統に属するすべての種」が人類と呼ばれるが、「現在生きている私たちヒトは、25種以上いた人類の、最後の種ということになる。」すなわち「約5年前に、ホモ・フロレシエンシスが絶滅した。約4万年前に、ネアンデルタール人が絶滅した。その前後に、デニソワ人が」絶滅した。そして現在生き残っている人類は、私たちホモ・サピエンスだけになってしまった」ものである。その原因として「他の人類よりも頭がよかった」ことは理由の一つかもしれないが、「結局、生物が生き残るか、絶滅するかは、子孫をどれだけ残せるかにかかっている。」すなわち「わたしたちがどこでも生きていける生物だということだ。寒くても、暑くても、私たちは平気で生きていける。それには、なんでも食べられるといった身体的な強さだけでなく、衣服のような文化的な工夫も役に立っているだろう。・・・有限な地球上で、どんどん

増えていくためには、いろいろの環境で生きられることが必要」であり、それがホモ・サピエンスが生き残った最大の理由であるとする。すなわち「優れたものが勝つ残る」のではなく、「子孫を多く残した方が生き残る」というのが本書の結論である。

なかなか興味深い結論であるが、これに関連して面白く感じたのが人類が生存する環境が変化するとともに変わってきた食の推移についての記述である。人類はもともと森に棲み果実等を主に食していたが、森林の減少等によって草原というよりは疎林で地上に降りて生活するようになって、動物の死骸を中心に肉食するようになった。そもそも直立二足歩行は走るのが遅いことから進化しなかったのであるが、「人類は石器を使い始め、肉を頻繁に食べるようになった。すると、隠れていた直立二足歩行の利点が現れはじめ」、肉を求めて歩く距離が増え、さらには走るようにもなったという。そして肉食とともに脳も大きくなったと見る。一つはカロリーが高い肉を食べることで、脳が働くためのエネルギーが確保されるようになるとともに、肉は消化しやすく、腸が短くてすみ、その分のエネルギーを脳に回すことによって脳は大きくなった可能性があるとする。

ともすれば主食と副食の区別がないのがヨーロッパであり、これに対し日本は穀物による主食が明確であること、また「肉食文化と魚食文化」と対比して語られることも多く、文化的視点での見方も納得性は高い。一方で、人類史という超ロングの視点で見ると、人間の歯が前歯2本、犬歯が1本、小臼歯が2本、親知らずが1本で、これが上下左右にあって32本となるが、歯の種類と本数が人類が何万年もの間、肉食も含めて食いつないできた歴史を物語っているのも興味深い。

（農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷栄一）